

# 母校へのこだわり

— 私学岩手中・高校の魅力求めて —

柄内 松四郎 (旧10回生)

母校創立七〇周年を迎え「石桜七〇年誌」を刊行することは喜びに堪えません。

創立五〇年には「石桜五〇年史」を刊行し、今また七〇年誌を刊行することは母校の歴史の足音を後世に伝える意義深い事業としてその成果を期待するものであります。

「母校へのこだわり」これは卒業生の誰しもが心の底に持ち続けておるものであります。が、私にとりましての岩手高校は、在学中の五年、同窓会副会長としての四〇年、そして水泳部とOB会櫻泳会会長として今も続いている水泳仲間との長い年月、七三歳の今日までの人生のうち六〇年にわたり岩手高校の息吹きは私の体内に住みついたものでした。

その「こだわり」をたどれば、それは三田義正翁の建学の理想であり、石桜精神の「やれば出来る」のもと、義正翁が目指した「個性豊かな逸材を輩出出来る私学」であり、求めるのは、質実剛健「強く健やかな人間」でありました。

それを顕在するためにも、県内の私学とし

て最も古い伝統をもつ岩手高校は、自由で強い個性と教育方針をもつ逞しい学校として、進学にスポーツに、公立にない独特の魅力をもった私学として、同窓生の母校愛のシンボルになる岩手高校を願ひ、それを目指し、その可能性を信じて「こだわり」続けて来ました。

在学時代——私が在学したのは昭和一〇年より昭和一五年、日本が戦争への道をまっしぐらに進んでおった時代でしたが、学園生活は自由で楽しいものであり、佐々木哲郎校長の教育者としての優れた人格の投影のもと、青春時代の人格形成の基礎が造られた時代でありました。その中の幾つかの思い出を綴ってみます。

まず入学一年の年の一〇月「秩父宮殿下の御台臨」、当時として大変な母校の名誉であり、岩手中学生としての誇りをもりました。つづいて一二月には建学の父三田義正翁のご逝去があり、建学の精神「石桜精神」を強く心に刻み込むことが出来ました。

昭和一三年には新校舎が仁王田圃に完成、

その時の強い思い出は巨巖の台座にのった奉安殿（天皇・皇后両陛下の御写真を安置した）を全校生徒で大沢川原の旧校舎より仁王田圃の新校舎まで曳いて運んだことであります。

まさに軍国主義時代の象徴的できごとでしたが、この時の全校一体となった移転行事は岩中生徒の友情の絆と結束で貫かれました。

またこの時代のラグビー、アイスホッケーの試合では盛中（現在の一高）との対抗意識が強く、応援合戦がエスカレートして、喧嘩となることも多く、その時の合言葉は「敗けて帰るな」これが石桜魂だと言うことで、いいにつけ、悪いにつけ石桜精神が皆の心に根づいておりました。

四、五年生頃になると軍国主義教育が強まってきましたが、学園生活は気骨とユーモアに富んだ多くの先生方の、ある時は厳しく、またある時は思いやりのある教えのもと、優秀な生徒も悪童ぶりが勝る生徒も、のびのびとしかもスポーツや、教練となると石桜精神のもと他校に負けない成果を挙げ、誇りをもった、楽しくも自由闊達な岩中生活でした。

石桜同窓会時代——二代目松浦文彌会長、三代目松見得明会長と二代にわたって昭和二九年より平成六年まで四〇年間副会長として務めてまいりましたが、松見会長の勇退とともに退任させていただきました。

その間微力で、理想とした私学の名門岩手

高校を同窓の諸兄の期待する姿まで押し上げることが出来ませんでした。が、両会長を始め三〇年代の戸嶋正夫副会長、五〇年代の熊谷童男副会長、六〇年代の藤澤敬三副会長等の良き先輩のご指導と、母校を愛する各界の多くの同窓の皆様との公私にわたる交わりは、岩手高校との絆をより深いものにしていただき、充実した幸せな年月でした。

その間の思い出深いことの二、三を綴ってみます。

その第一は昭和三〇年スポーツにおける母校始まって以来の快挙である野球部の甲子園出場であります。

大会前には優勝の声すらなかった岩中でしたが、一戦一戦勝ち進むごとに、ひよっとすると、ひよっとなるかも知れないと応援の帰りに同窓の幹部や先輩と一杯やりながら、もし優勝した時慌てないように、パレード用の車の用意をしようということになり、トヨタの高橋功先輩にお願いし、車を用意しました。

優勝した時の市内パレードには、先頭のオーブンカーでマイクをもって呼びつづけました。その後の寄付金集め、地元を始め、東京に寄って、大手の釜鉄の本社や、鹿島建設その他にお願いし寄付を集め、甲子園にかけつけました。

大阪に行っても、応援の小旗や応援体制づくりには、宮古のラサ工業の大阪工場の皆さま

んや、郷里にゆかりのある方々に、大変お世話になり、温かいご支援は甲子園出場の際での忘れ得ぬことでした。

校舎再建と創立五〇周年事業——昭和一三年に建てられた木造二階建ての校舎は傷みがひどく、再建を望む声が強く、同窓会でも四〇年代後半には、その要望する声も強くなり、昭和四九年の総会では、五〇周年をめざして一億円の募金運動を進めることを決定、あわせてこれを校舎改築資金の一助として、校舎再建運動にはずみをつけたいと願いました。

この運動は創立五〇周年総会には最大の盛り上がりを見せ、五〇周年の記念諸事業の成功とともに、同窓会の母校愛の情熱が校舎再建にむかつて、最大に盛り上った時期でありました。

その後、幸か不幸か昭和五二年四月に校舎火災が発生し、校舎は新築されました。その後も学校環境の整備が進み、昭和六二年には校舎の増築や、グラウンドの整備、新体育館の完成、新プールの建設等の整備が進んだことは喜ばしいことでありました。

同窓会ではその後も六〇周年事業を始め、近年においては、滝沢村の野球グラウンドの整備の推進や、NHK大河ドラマ「炎立つ」で一躍時代の作家となった、同窓生高橋克彦氏の記念講演を同窓会主催事業として、県民会館大ホールで開催する等の諸事業に取り組んで来ましたが、その原動力となったのは松見得明会長の母校愛の情熱であります。

八〇歳を望むお年になっても衰えなかった



筆者の背泳



筆者と水泳部員（昭和14年）



理想とする岩手中・高校を目指した意欲に、私はその四〇年近い年月、ともに情熱を燃やし、歩んでこられたのも、松見先生の力であり、政治生活をも歩んでおりました私は、公私にわたって力になっていただいたご恩義は終生忘れ得ぬものであります。

今七〇周年を迎え、岩手中・高等学校が岩手の伝統ある私学の名門校として七〇年にわたり、その地位を確保して来たことに、われわれは大きな誇りをもつものです。

その間学園環境の整備、教育内容の充実、スポーツの振興等、校風の振興に努力してこ

られた、歴代の理事長、校長をはじめ職員・生徒、そして同窓生の熱意に敬意を表するとともに、七〇周年を迎え、さらに二一世紀に向けて、新しい時代の名門岩手中・高等学校の理想の姿を目指し、今後とも強く「こだわり」つづけてまいります。